CITY

山手線膝栗毛

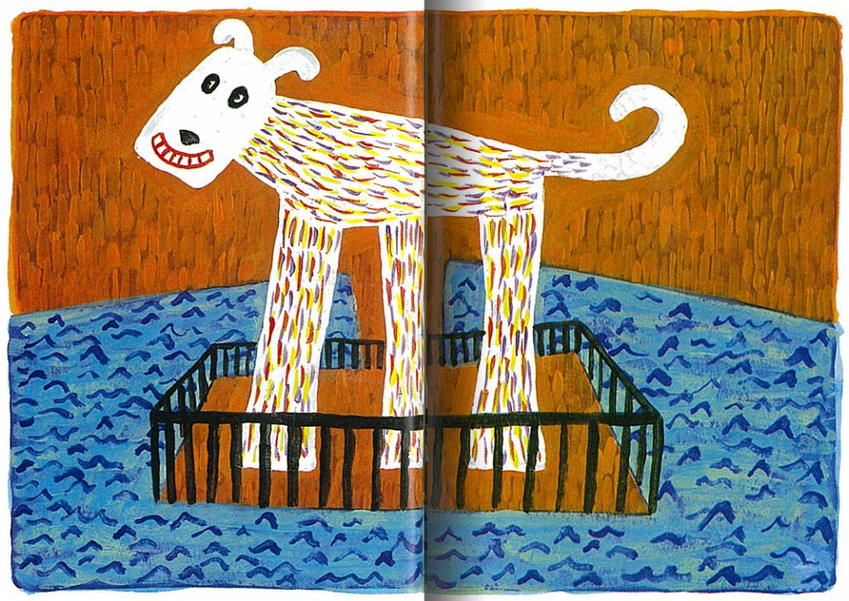
目黒

MEGURO

私は目黒のはんこ屋さんを訪ねた。
はんこを買うためではない。
道を尋ねるためだ。
それでもはんこ屋さんのおばあさんは
「いらっしゃい」と声を
かけてきた・・・。

テクニカルライター
小田嶋 隆

Illustration. Takeuchi Kazuya



東京の中の出島

6月の、ある週日の午後、目黒の駅前に立って、あたりを見回してみる。特に何の感慨も浮かんで来ない。

「変わったなあ」

と思えるほど昔の目黒を知っているわけでもない。現在の目黒を見ても、ああそうですかとしか思えない。目につくのは、外人さんの姿が多いことだが、それがどうしたとも思わない。昨今はどこを歩いても外人さんが多いことに決まっているのだ。

「出島みたいなところだよ」

と、麻布に住んでいる友人は、そんなふうに自分の町を評していたが、目黒だって恵比寿だって、私の住んでいる笹塚だって、昭和40年代の基準からすれば、皆、出島みたいなものだ。たとえば、うちの近所のスーパーで、私は、外人さんがネギを買っていたりする現場にしょっちゅう出くわす。

「おい、外人がネギ買ってたぜ」

と、20年前ならば、私はクラスの仲間たちに得意気に吹聴したろうが、もちろんいまはそんなことはしない。彼らが駅前の立ち食いそば屋で、器用に山菜そばを食べているのを見たとしても、もはや私は驚かないだろう。

出島に住んでいる人間は、心の中にひとつの出島を作る。そして彼は、その出島を通じて、異国を受け容れる・・・読むことのできないフランス語のメニュー、英語と日本語の入り交じった子供番組、句読点の代わりにカンマとピリオドを使っている雑誌、ユタ州からやってきた軽薄な外人タレント・・・そうしたもののすべてを、私は心の中の出島に迎え入れている。いやもっと正確に言えば、私はそれらのものを出島に封じ込めているのだ。

そう、私は、いざとなったらいつだって鎖国してやろうと思っている。しかも、私の心の中の王国は、日本との国交断絶も考慮している。

はんこ屋さんのおばあさん

話を目黒に戻す。

駅周辺は、道が妙な具合に交差している。で、車の通りがやけに激しいのだが、国道沿いに並ぶ商店街そのものは、案外に昔風のたたずまいを残している。

不思議なことだ。どこの町でも、商店街は必ず昔風に見える。

商店街というのは、人々の変わりようの速さに半歩遅れる宿命を抱いているのだろうか。あるいは、商店は、店の主人と一緒に歳をとって行くものなのだろうか。

時計屋、洋品屋、はんこ屋、下駄屋、かけはぎ屋・・・そうした絶対に繁盛しているはずのない店が、どこの商店街にも必ず残っている。そして、そういう店には、必ずや年寄りの夫婦が座っていて、一日中、来ない客のために、必要のない準備を整えている。

不可解なことだ。彼らは、そんな流行らない店をやってるよりは、いっそ駐車場にでもしたほうが割が良いとは思わないのだろうか。

きっと、思わないのだろう。

だから、じいさんは店を畳まない。

「はい、いらっしゃい」

と、だから、ばあさんは言う。

しかし、私ははんこを買いに来たのではない。

私は、道を尋ねようとしているだけだ。

いったい、こういう町の、こういう店では、道を尋ねにくる客と、はんこを買いに来る客のどちらが多いのだろう。

私は、悲しい気持ちになった。

たぶん、客の来ない店で、死ぬまで客を待っているばあさんの気持ちが乗り移ったのだと思う。こんなに悲しいことはない。

悲しい気持ちのまま、私は裏道に入った。

老人が多い、と私はまず第一にそう思った。

それも、おばあさんが多い。

週日の午後だから、そんなふうに見えただけなのかもしれないが、それにしても、駅前を歩いているのが若者や外人ばかりであるのに比べて、一歩路地に入り込んだ時の老人の多さはちょっとしたものだ。

いったい、このおばあさんたちは、この出島みたいな町で、どんな暮らし方をしているのだろう。

私はますます悲しい気持ちになった。

地方の人間が東京を変える

目黒は、本来なら、典型的な住宅街だったはずの街だ。静かで、緑の多い、のんびりとした、庶民的な住宅街だったはずの町だ。昭和の初期、あるいは、明治大正の頃にここに家を買い求めた人々は、近所の顔見知りが次々に引っ越して行ったり、自分の家のまわりから生活用品を売る商店がなくなってしまったり、町中がよそ者に占拠されるようになるなんてことは予想していなかったはずだ。

しかし、現実に、目黒は、もはや住宅街ではない。今後はさらにひどいことになるだろう。だって、港区や渋谷区から押し寄せてくるトレンドを押しとどめることは、誰にもできないからだ。

だから目黒には、若者向けの妙な店ができる。そうやって、目黒区は徐々に港区化して行く。そして、無論のこと、近所の豆腐屋や八百屋は、じきに地上げにあってマンションやフォトスタジオに姿を変える。地価だってうなぎのぼりに上がるだろうし、地域の物価もそれに合わせてぐいぐい上昇する。

とすると、土地を売って儲かるということはともかく、昔からの目黒の住人にとって、良いことはひとつもないってことになる。

憂鬱な話だ。

しかも、これは目黒に限った話ではない。都心に近い住宅地は、皆、同じ問題をかかえている。私の高校のあった巣鴨のあたりも、もはや人間が住めるところではなくなりつつある。赤羽のような東京のはずれの町でさえ、既に駐車場が見つからない町になってしまっている。

というわけで、最近、私は引っ越しを真剣に検討している。通勤をしない私のようなものにとって、渋谷区に住んでいるメリットは何もないと思うからだ。

東京は、確かに便利なところだ。また、様々な刺激に満ちた場所でもある。

しかし、独身の若い者ならいざ知らず、家庭を持つ中年以上の人間にとって、東京は要するにコストが高いだけの街なのだ。

特に、年寄りはきついと思う。

東京は、年寄りに何の楽しみも提供しない。年寄りが好むような、昔ながらの、自然に根ざした、商売に結びつかないタイプの娯楽は、ここにはひとつも残されていない。

確かに、若い、勢いの良い、軽薄で移り気な、金のある自信に満ちた人々にとって、東京は魅力的な街であるかもしれない。

が、誰しも、永遠に若者であり続けることはできない。永遠に刺激を求め続けることも、不断に変身し続けることも不可能なのだ。

それでも、東京は、その時々の若者の思い思いの気まぐれに媚びながら、これからもずっと変化し続けていくのだろう。

畜生。実にけったくその悪いことだ。

大学にはいったばかりの頃、私は、地方から出てきた連中がなんともうれしそうであることが不思議でならなかったが、今になってようやくその理由が分かった気がする。

彼らは、東京に出てきたその日をもって、田舎の秀才から、自由な都会のコスモポリタンに変身することができたのだ。彼らが彼らの田舎で受け続けてきたさまざまな抑圧や禁忌は、東京に出てきた瞬間に雲散霧消してしまったのだ。

一方、東京に生まれ育った私の人生は、彼らのそれのような劇的な変化をしなかった。

そんなわけなので、我々東京人は、絶対に地方の人間にかなわない。彼らが東京を自分の思い通りに変えてしまうことに、我々は絶対に抵抗できない。

ちくしょう、鎖国だあ！と私は思う。

目黒のはんこ屋のばあさんも、きっと同じ気持ちだと思う。